信毎俳壇

神野　紗希 選

おほかみのこゑや太陽極大期　（小諸市）加藤　陽介

棒読みのようにセロリの咀嚼音　（中野市）風間　陽介

ヒバクシャはオスロへ冬麗の旅立　（塩尻市）長　三枝子

なゐの國山鬱々と眠り初む　（上田市）竹内　重美

菜洗いの洗い場待ちに本読めり　（箕輪町）平沢　茂秋

てぶくろの左右をつなぐ紐を編む　（佐久市）町田ゆかり

おひめさまじゃなくっていいやゆきだるま　（中野市）風間　一乃

白鳥の白し原発再稼働　（下諏訪町）立石　理

熱燗の五杯位で吾酔はぬ　（長野市）中沢　義寿

吾もまた母の遺品や年明くる　（安曇野市）丸山　進也

佳作

時雨るるや喪中葉書は楷書体　（松川村）岡　豊村

骨董屋の名刺は面子冬ぬくし　（佐久市）竹内　勝代

選評　一句目、11年ごとの極大期には太陽の活動が活発になる。狼（おおかみ）の遠ぼえも太陽フレアの波動に呼応しているか。大自然への畏怖が凝る。二句目、セロリをかむ音を棒読みとなぞらえた。少し退屈な冬の気分。三句目、ノーベル平和賞を受賞した被団協への敬意を「冬麗」の清浄に託した。核廃絶への旅はまだ終わらない。四句目、日本は地震列島。願わくば、山の眠りを覚ます地震が起こらぬよう。

坊城　俊樹 選

木枯らしや乳房に子らを抱く母　（佐久穂町）石田　弘子

押入の玩具つと鳴る冬の夜　（東御市）大塚くに男

凩の中を帰りて犬を抱く　（小海町）依田　久代

一人居の老いを眠らせ雪積もる　（松川村）岡　豊村

湧水に大根洗へばなほ白し　（松本市）伊藤　和夫

とんぼを切る絡繰人形飛騨に雪　（長野市）荻原　宏祐

雪の嶺々つよく肩組み南北に　（松本市）小林　幸平

ウインドに額押し付け冬覗く　（下諏訪町）中村　久

新藁の匂ひの中に眠る猫　（南相木村）猿谷　秀

山茶花や咲きそめし時散りそめる　（立科町）村田　実

佳作

掃納土蔵に残る真田紐　（長野市）清水美佐子

積み上げし薪が軒突く冬籠　（大町市）原田　勝

選評　一句目、これは母というものの絶対的な賛辞である。聖母の姿のようにその乳房に子等を抱く。木枯らしからわが子を守る姿は崇高ですらある。二句目、冬の夜の室内の暖かさ。押し入れの玩具は幻の音を鳴らした。寝入っている子供たちの夢のように。三句目、凩（こがらし）の寒さを自宅へと急ぐ。そこには彼女のことを待っている愛犬がいる。やっと帰宅してその温かな毛並みを抱く至福の時。

今井　聖 選

抱き上げし兎の鼓動速かりき　（箕輪町）向山　政俊

冬用意目高の池に蓋をして　（飯綱町）坂井　寿男

眉引くと小顔になりぬ初鏡　（白馬村）碓井　つね

手袋を咥へて開くレジ袋　（長野市）原田　浩生

死ぬ気などなくて冬服買ひにけり　（伊那市）中村　茂子

数へ日の掃除機出せば逃げる猫　（箕輪町）松沢　陸

居酒屋の何時もの席の聖夜かな　（長野市）坂口　智弘

柵越えの白球ひとつ枯木立　（松本市）伊藤　和夫

湯豆腐や禁酒守りて夫五年　（須坂市）丸山　英子

雑踏はみな猫背にて冬の虹　（長野市）武田　芳子

佳作

雪焼の若き市長や初登庁　（小諸市）加藤　陽介

四代の似た顔揃ひ七日粥　（中野市）芋川　菊水

選評　一句目、抱き上げた兎（うさぎ）の鼓動を感じるのは自分の肉体。両者の肉体の接点が二つの「生」をつないでいる。二句目、目高が雪に埋もれないように、水槽の水が凍らぬように。それも「冬用意」。三句目、今は小顔願望の時代。眉を引くことでその願望がかなえられていることを実感している。四句目、レジ袋有料は近年のこと。そのレジ袋を、手袋を脱ぎそれを口に咥（くわ）えて開く。瑣事に見えて描写が鋭い。